

令和5年度〔自己評価報告書〕

学校番号	学校名	校長名
55	川崎市立 末長小学校	坂本 正治

学校教育目標	学校経営の目標	今年度の重点目標
「誰もが明日も登校したくなる学校」の創造。 ～地域を愛し、地域の強みを生かして～	○子供の人権を尊重する学校 ○子供の主体性な学びを育む学校 ○子供が安全に安心して過ごせる学校 ○家庭・地域から信頼される学校	○「主体的に学習に取り組む態度」が育成できるような 「子供を主語にした授業」づくりを進める。 ○友達や地域の良さを認め合い、意欲的に協働して課題や活動に取り組める場を保障する。

評価項目	具体的な取組	成果と課題	具体的な改善策
1 「主体的・対話的で深い学び」の視点に立った不断の授業改善	①児童の主体的な交流を支える「聴く力」「話す力」の育成を全ての教科を通じて行う。 ②GIGA端末とクラウドを有効活用し、個別最適な学びと協働的な学びを一体化させられるよう、多様な実践を取り入れ、職員間で共有していく。 ③ノート指導など、日常的な学習の見取りや支援を大切にし、子供一人一人の良さを見つけられるような評価方法の実施に努める。	①説明的になりがちだった授業が、子供たちの考えを交流することを大事にした学習に少しずつ変わってきた。「聴いて 考えて つなぐ」学習の素地となる「聴き方・話し方」の日常的な指導も年間を通して行えた。先生方も「教える」という意識から「学ばせる」という意識へ変化してきているように感じている。ただ、教科によってはまだ十分に浸透できてはいないことが今後の課題になる。 ②オクリンクなどを活用した交流など、学習場面での活用に広がりを感じられるようになった。しかし、教室(指導者)による差がまだある。他校の実践を持ち寄るなど、より有効な活用法について学校全体で探っていけるようにしたい。 ③国語のワークをやめた功罪として、一人一人の思考に対して適切な支援を行う教師が増えたことが挙げられる。また何より子供たちが	①年度当初に「授業の在り方」、学習を通じてどのような力を育てていくのかを共有していきたい。 ②定期的に部会会議を開き、有効活用事例を紹介し合えるようにするとともに研修の機会を計画的に設ける。また、センター職員など専門性のある外部講師も招聘していきたい。 ③新しい教科書となることをふまえ、しっかりと教材研究をして授業づくりをすることを継続していく。また、自分の考えの変容が明確になるような学習ノートの在り方について検討を重ねていく。
2 地域と連携した教育活動の充実	・キャリア在り方生き方教育の充実を図るために、意図的・計画的に地域とかかわりをもって進める学習活動を展開する。 ・キャリア在り方生き方教育と道徳教育を関連させ、地域に支えられている良さを実感させるとともに、自らも地域の一人としてかかわっていこうとする態度の育成を図る。 ・地元企業の富士通ゼネラルと連携した教育活動を継続していく。	キャリア在り方生き方教育を推進するために、3年間コロナでできていなかった地域との連携教育の充実を図った。見学や出前授業の再開を通して、地域に支えられていることを実感できるよう道徳教育とも関連させた。子供たちはまちの良さを再発見し、より愛着がもてたのではないかと感じている。また 地元企業の富士通ゼネラルと連携した教育活動の他、「脱炭素アクションみぞのくち」に加盟している団体と連携した教育活動も行えた。	来年度は市制100年の節目の年となる。地域と連携した花づくりなど新しい取組も計画していきたい。また、コミュニテースクールが発足するので、地域全体で末長の子供たちのキャリア教育が推進できるよう工夫していきたい。
3 児童指導	心理的な不安や健康面での不安を抱える児童に対して、早期に不安をとらえ支援を行えるように、COを中心とした校内連携を密にし情報の共有を図る。また、いじめの未然防止・早期発見ができるよう、アンテナを高くて日常的な見取りや聞き取りを行うようにする。	COが中心となり相談機関と連携しながら、困り感のある保護者や児童に寄り添ってきた。登校に不安を抱えている子供に対して様々な登校の仕方(別室、取り出しなど)があることも周知し広がりを見せてきたように思う。いじめ問題は完全解消には至っていないが、年度途中に「いじめ防止標語」に全校で取り組み掲示するなど、子供たちが自分事として受け止められるような手立ても講	様々な事情を抱え、不登校傾向を示す児童が今だ増加している。児童指導と学習支援の両面から支援が進められるように校内体制をさらに整備していきたい。
4 特別活動	児童が主体的に取り組めるような児童会活動を充実させる。また、大規模ゆえに全校交流が難しいので、ペア学年による異学年交流を活性化し、上級生と下級生が学び合える場を保障していく。	委員会では児童の創意で様々な取組が復活してきた。運動会やクラブ・委員会活動、児童集会などでは、GIGA端末の活用などをするなど、運営方を工夫しながら、コロナ前の活動へ戻すことができた。また、児童朝会を設定するなど、活動の機会を増やす動きも出てきた。	3年間ストップしていたことで、モデルの無い状態での活動スタートだったことを思うと、次年度は4月から計画的な活動が進められそうである。高学年の担任だけでなく全ての教職員で児童を育てていく意識をもって進められるようにしたい。
5 防災・防犯指導(危機管理)	非常時に誰でもすぐに動けるマニュアルの作成と訓練の実施に取り組む。また、自分の命を自分で守る防災教育にも取り組む。	休み時間を活用した無告知の訓練など、様々な想定をして訓練を実施できた。また、大規模震災時の引き渡しなど、より現実に即した準備を進めていきたい。	能登半島地震の様子などを教材化し、防災への意識を高めていきたい。

6	情報教育・情報管理	GIGA端末を活用した授業を進化させる他、業務の改善につながるよう活用を広げていく。合わせて、学年に応じた情報モラルの学習を進めながら、学校と家庭でのGIGA端末の使用を進めた。	会議でのペーパーレスを進めるほか、検討事項をGIGA端末によって進められるよう工夫改善を進めたことで、会議時間の縮小にもつながり、教材研究の時間確保ができるようになった。情報モラルについては、大きなトラブルにはなっていないが、SNSの利用には潜在的な危険をはらんでいる。外部講師を招いた授業など、情報モラル教育を充実させる必要を感じている。	いつも会議は対面で、という意識を捨て、効率的に時間を活用していけるよういっそうのGIGA活用を進めていきたい。先進的に実践している学校の情報を取り入れるなど、教職員の意識を高めていきたい。
7	開かれた学校 情報発信	参観や運動会などは、分散して行うなどの対策をして積極的に実施する。また、学校HPを活用し、学校での取組が伝わるような工夫にも力を入れる。学校説明会・報告会はオンライン配信を行う。	分散型ではあったが、保護者を招く機会を増やしたことで学校への理解は深まったように感じている。懇談会では子供の姿を通しての懇談ができたことも良かった。教育に対して様々な変化がある昨今、学校HPだけでなく様々な場面でのPRは今後も大切になることを感じる。	来年度はコミュニティスクールを実施し、学校での取組を発展させていくとともに、その取組の趣旨を地域に発信していくようにする。また、「脱炭素アクションみぞのくち」の推進委員メンバーとも連携し、SDGsの実現を目指した教育活動を進めていきたい。
<b>学校関係者の評価</b>		<b>学校運営のまとめ</b>		
<p>少しずつコロナ禍での取組が解消されていったことで、学校生活に活気が戻ってきた。茶の湯体験など、地域の方をお招きしての学習も復活できた。大規模での苦労はあると思うが、子供たちの個性を伸ばす教育を進めていってほしい。</p>		<p>教職員が力を合わせ、新しい取組にも前向きにチャレンジできた。特に授業を改善し「子供を主語にした授業」づくりに力を注いだことで、子供の伸びを実感できていることは大きい。次年度はさらに地域・保護者と連携し、「末長らしい教育」を推進してけるようにしたい。</p>		



